

第20回まちの駅全国大会 in ふくおか

～熊本地震復興支援“震災からの一年 甦れ九州!!～

【日時】2017年9月29日（金）～10月1日（日）

【会場】JR 博多シティ 大会議室 （福岡市博多区博多駅中央街1番1号）

【主催】全国まちの駅連絡協議会

【主管】まちの駅全国大会 in ふくおか実行委員会

【後援】総務省、観光庁、福岡県、福岡市、九州観光推進機構、AIE（九州連携機構）



まちの駅全国大会 式典

9月29日 13:00～13:45

開会挨拶

上野春樹(まちの駅全国大会 in ふくおか実行委員長)

みなさま、九州、アジアの玄関口、博多へようこそ。

1年半前に福岡市で全国大会の開催を決めた時点では、熊本地震からの復興支援がテーマでしたが、今年の7月に「九州北部豪雨」があり、我が朝倉市にも甚大な被害が出てしまいました。被害を受けたまちの駅に対して、被害を受けなかったまちの駅から気づかいや支援があり、まちの駅同士のつながりに感銘を受けました。道の駅はハード事業、まちの駅はソフト事業だと言ってきたが、まちの駅の人の繋がり、交流・連携の意義を実感しました。

20回目の全国大会なので記念誌を発行しました。現在、全国のまちの駅数は1599ヶ所ですが、3000ヶ所を目標にと言っています。

訪日外国人観光客が増えており、2020年には年間4000万人になると言われています。海外からの観光客に対応できる「まちの駅」を考える必要があります。地に足の着いたまちの駅のあり方を模索していただきたい。

まちの駅は、当初はトイレの無償提供がテーマだったが、今ではコンビニがトイレも貸しており、コンビニの方が入りやすい。次のテーマを「海外対応ができるまちの駅」にして、更なる発展を目指したいと考えます。

福岡で大会を行うにあたり、実行委員会では参加者150名を目標にしたが、184名の申込みがありました。九州・沖縄全県から参加をいただいたことをうれしく思っています。民間が前に出ながら、行政がバックアップする形が、これからのまちづくりのあり方ではないかと考えています。まちの駅を核に、さらなる目標に近づく大会にしたいと希望します。最後までよろしくお願いします。



まちの駅ネットワークみつけから、朝倉市の被災したまちの駅のために支援金が送られた。

会長挨拶

久住時男(全国まちの駅連絡協議会会長/見附市長)

みなさま、こんにちは。20回目の全国大会になりました。私は第6回目から会長に就いているので、今回が15回目。実行委員の皆様をはじめ、関係各位に感謝を申し上げます。

昨年4月の熊本地震、今年7月の九州北部豪雨の復旧復興の中、被災された方にお見舞い申し上げるとともに、我々として何ができるのかが課題であると思います。

まちの駅は、平成10年に社会実験がスタート、12年にまちの駅連絡協議会を立ち上げました。翌13年には、甘木朝倉で21駅のネットワーク組織を作った。ネットワーク型まちの駅の発祥の地です。

平成27年、まちの駅九州・沖縄会議の10周年大会に呼ばれ、この場所で講演をしました。いただいたタイトルが「地方創生とまちの駅」。難しいテーマでしたが、そこでお話したことは、「こんないい地域はない」という思いの力。地方創生においても「自らの地域が好きでたまらない」という「思いの競い合い」が、これから進めるべきことではないか。また、交流・連携と言いつつしてきましたが、それは「顔の見える関係」を如何に作るかに尽きるのではないか。交流人口、関係人口を増やしていくことが、地域の魅力になるということです。

私は、市役所を退職される方に「我逢人」と書いた色紙を贈っています。「人生の豊かさは、どれだけ多くの良い人と出会えたかです」という意味を込めて。人との出会いを大切にして、関係人口を増やしていくことが、これから求められるまちの駅の姿ではないでしょうか。

今日から、知恵と情報と元気を交換する2日間に、思い出深い大会になることを祈念して、挨拶といたします。



来賓挨拶

松尾勝徳氏(小竹町長)

こんにちは。「まちの駅全国大会 in ふくおか」の開催、おめでとうございます。全国各地から熱い思いを持った方にお集まりいただき、心から歓迎を申し上げます。



本日は、我がまちのアドバイザーである今泉重敏先生からの命を受けて馳せ参じました。まちの駅の大会は、元気な人が顔を合わせて、元気なまちを作っていこうという趣旨だと伺っております。まちの駅は「見えない線路でつながるヒューマンステーション」。市町村の枠、県の枠を超えて、網の目のように皆さんがつながっていく、交流と連携のまちづくり。皆さんのお話を伺って、我がまちのまちづくりの参考にしたいと考え、職員4名と一緒に参加させていただきました。よろしくお願い致します。

小竹町は福岡県の中央部、北九州市、小倉と博多の三角地帯の真ん中にある、筑豊炭田の旧産炭地です。昭和3年に町制施行し、来年1月1日が90年の歴史を誇ります。平成16年の合併でも単独の道を選んできました。石炭産業で発展してきましたが、エネルギー革命によって昭和44年までにすべての炭鉱が閉山、厳しい状況の中で何とか生き延びています。

産業振興策として、企業誘致を行いました。小竹町は、西はトヨタ自動車九州のある宮若市、南は飯塚市、北は直方市と接しています。43haの敷地に小竹工業団地をつくり、商業施設、エネルギー会社など17社を誘致して完売できました。JR小竹駅周辺も賑わいが出てきています。

小竹町は14.18㎡の小さな町であり、人口が8000人を切りました。人口減少は大きな課題であり、これから新たなまちづくりを進めたい。遠賀川には河川公園が整備されるなど、基盤整備ができたところですので、次は人づくり、人材育成だと考えています。

「暮らしを支える絆社会をめざして」を基本理念に掲げ、小竹町に「生まれて喜ばれる」「訪れて楽しい」「住んで心地よい」まちづくりを進めています。子育て支援のほか、「健康長寿・老楽のまち」構想の実現。定住促進のお試し体験施設として「こたけ創造舎」を整備、ここが我がまちの「まちの駅」候補です。

論語に「葉公、政(まつりごと)を問う。子曰わく、近き者説(よろこ)び、遠き者来たる」という一節があります。これこそが「まちの駅」であり、住んでいる人が喜びを感じるまちをつくるのが基本だという教えです。

今日は、職員といろいろ勉強して帰りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

事務局報告、役員紹介等

1. まちの駅の設置状況

- ・3月末時点でのまちの駅数は1599駅であった。そのうち、ネットワーク型まちの駅数は47地域で1468駅、単体型まちの駅(個人会員)は113駅である。その他、テーマステーションとして「健康の駅」が18駅である。
- ・昨年度1年間の新規加入駅数は109駅、退会した駅数は48駅で、61駅の増加となる。その多くは、各まちの駅ネットワークの中で増やしていただいている。

2. H29年度重点目標

- ①「まちの駅」のこれまでの経緯を共有化し、今後のまちの駅のあり方を検討する。
⇒全国大会記念誌を発行して各まちの駅への配布
- ②インバウンド観光が伸びている中、「まちの駅」の資源を生かした観光活動を展開する。
⇒全国大会の検討テーマとして具体的に検討・実践
- ③各「まちの駅」のスキルアップを図り、住みよい地域づくりに寄与する。
⇒各まちの駅の取り組み情報の発信、参考事例紹介

3. 事業計画

- ①「第20回全国まちの駅全国大会 in ふくおか」の開催
- ② 総会の実施(書面総会)
- ③ 運営会議の開催
- ④ まちの駅の普及、情報発信、活動の活性化、他、
- ⑤ その他、まちの駅に関する事業

4. まちの駅運営幹事・役員の紹介



5. 熊本地震と九州北部豪雨の報告

昨年4月の熊本地震と今年7月の九州北部防雨による被害状況と復旧・復興活動について、貴重な画像や映像を見ながら、吉水恵介氏より報告いただいた。

また、久住会長が首長の被災体験知をまとめた「災害時にトップがなすべきこと」を紹介、24項目を読み上げた。



ゲスト講師

石原 進氏(九州観光推進機構会長/JR九州相談役)

依頼を受けた時に、何を話せばいいの
か困った。JR九州としても、まちが元気
になることは大事な事。共通するであ
ろう JR九州の取り組みを紹介したい。



人口減少は死活問題

九州では日本全体より早く人口減少が始まった。5年間で60万人も人口が減少。このままでは2040年には、2割の人口減になる。鉄道会社としても死活問題である。

他の輸送機関との競争が激化している。福岡都市高速と九州縦貫道がつながって渋滞が解消し、自動車が非常に便利になった。バス会社は格安切符を作っており、価格競争では恒常的に負けてしまう。200億円の収入減となった。

新幹線の圧倒的なスピードで救われた。2011年の博多―鹿児島間全線開通によって、売り上げが伸びてきた。輸送人員は平成7年～8年をピークに下がっているが、熊本地震があっても昨年も若干伸びている。宮崎までも、高速道路と新幹線により3時間で行けるようになった。

徹底したサービス改善と事業の多角化

稼ぐために、徹底的な鉄道事業の改善を行っている。頻度、運賃、スピードアップ、新駅の設置など、国鉄時代は出来なかったサービス改善を徹底した。社員に「お客を大事にする心」をどう持たせるかが一番難しい。

また、鉄道事業だけでは成り立たないので、駅ビル事業で収益を確保。ホテル、建設業、流通、飲食、その他35社の子会社ができた。あわせて、コストの削減も徹底した。

国鉄時代の社員25000人から、JR改革時は15000人でスタートし、今は6000人。列車本数は1.8倍に増加。それでもサービスが低下しないようにした。

物件費の節約など、現場でないと気が付かない部分がたくさんある。現場で無駄を省く、社員の意識の問題。

褒めることで社員の意欲を醸成

新たなサービスの改善、サービスの意識付け、お客様を大事にすることを社員にどう理解させるか。

社員は気が付いてもそのままにしてしまう。そこで、現場の気付きやヒヤリ・ハットをイントラネット上に投稿してもらい、課題を共有化した。7割くらいは現場で解決できる。その他の本部がやるべき課題は、専属チームを作って2週間で対応している。自分が言ったことが形になると、社員はやる気になる。安全の発表会を開くと、褒めることでたくさん情報が出てくる。怒ると、自分のミスだと思われたいくないので出てこない。絶対に怒ってはいけない。

整理整頓や清掃でも、見えない場所まできれいに。誰でも出来ること。常に掃除をしていると、お客さんから

褒められる。それが本人に伝わるとやる気が出てくる。覆盖面調査でランキングを付けると、順番を気にするようになった。競争が一番の進歩の原理である。初年度は平均点が54.3点だったが、今は91.3点になっている。JR九州の社員の接客サービスは、鉄道会社の中でもトップクラスではないか。ただし、緩めるとすぐダメになる。褒めたり、褒美を付けることでモチベーションを高めている。

Designへのこだわり

Designの効果は大きい。お客の満足度向上、社員のサービスセンスの向上、街の人々の心を豊かにする、等々。受賞も多く、JR九州のイメージ向上にもつながっている。

九州新幹線では、内外装に地場の工芸や材料を使っている。800系の金箔は、九州にはないので金沢の業者にコーティングを依頼したが、とても評判がいい。金箔は日本の文化であり、違和感はなく、とても美しい。885系ではシートを本革張りにして木材を活用している。特急「海幸山幸」は、飴肥杉を内装だけでなく外にも貼ったが、東京から飛行機で宮崎に来て乗っていく方もいる。

駅舎デザインにもこだわりを持っている。由布院駅は、1990年に磯崎新のデザインで建て替えた。2015年には日田駅を全面リニューアル。日向市駅は内藤廣による設計で、地元杉材を使っており、ブルネル賞最優秀賞を受賞した。乗務員の制服は列車や役割によって変えているが、有名デザイナーの作品を使用している。



観光列車の試み

ローカル列車では、一番のお客である高校生が減っている。廃線には出来ないので、観光列車を走らせ、列車に乗ることを目的にした観光客を集めて、トータルで採算をとっていく戦略である。肥薩線では海拔400mのスイッチバックやループ線。三角線では特急「A列車で行こう」で三角駅前から高速ボートに乗り継いで天草まで行くルート。SWEET TRAIN「或る列車」は、内装も豪華にシェフの弁当とスイーツを付けて24,000円の運賃。クルーズトレイン「ななつぼし」は大変な人気である。

地域との取り組み

平成11年からJR九州ウォーキングをスタートさせ、年3回、早春と初夏と秋に開催している。90ヶ所くらいで、地元と一緒にオリジナルコースを設定しており、毎年15万人もの参加がある。常設コースのマップも設置している。

駅弁グランプリは、34候補に絞って人気投票をして決める。マスコミが取り上げ、弁当屋もやる気になっている。

駅前を魅力的にすることで賑わいづくりを図っている。

進行役：岩切正司、今泉重敏

事例報告① まちの駅ネットワークみつけ

- ・まちの駅 NW みつけは平成 18 年に 18 駅でスタートし、今は 40 駅。キーステーションは「ネーブルみつけ」。
- ・組織形態は、事業部会、交流部会、広報 PR 部会に分かれて活動している。交流部会は、会員同士の相互交流。新規まちの駅を訪問したり、研究会を開いたり、近隣まちの駅との交流、等。広報 PR 部会は、WEB 管理やパネル展示、パンフ作成など情報発信。事業部会は、イベント関係。市民向けのまちの駅めぐりやまちの駅講座などを開催している。3 月の「春のまちの駅物産フェア」では、各地のまちの駅の物産を紹介、販売している。
- ・まちの駅 NW は市民団体として行政と業務委託契約を結び、行政が年会費分の補助をしているほか、事務方として文書作成や総会・役員会の事務、各駅への連絡調整、イベントの準備などをサポートしている。産業部門がまちの駅の担当になり、地域の活性化や地域経済の波及効果を狙っている。異業種交流の機能を支援している。
- ・課題としては、本業とのバランスが難しい。活動参加の温度差があり、事務局からの働き掛けが重要である。

事例報告② まちの駅ネットワークかぬま

- ・まちの駅 NW かぬまは、現在 103 駅。キーステーションの「まちの駅新・鹿沼宿」は、当初「道の駅」にする案もあったが、市街地にあるので 24 時間開放のトイレや駐車場の設置は難しいと判断した。中心市街地活性化の計画の中にまちの駅を位置付け、市全域にまちの駅を作った後、大型スーパーの跡地に「新・鹿沼宿」を整備した。発足 10 年目に 100 駅を越えた。
- ・最初の話し合いの時、「今もトイレは貸している」「道も聞かれば案内する」「郵便や配達の方が縁側で休んでいる」ということだった。「辞めるのも自由」という気軽さと行政支援の安心感から参加が増えたと思う。
- ・市民の自主活動として位置付けており、自分から参加したいという方だけ参加してもらう。市から参加を依頼することはない。まちの駅メンバーにも「誘ってはいけない」と言っている。業界団体が「みんなでまちの駅になろう」という話があったが、やりたくない人まで付き合いで入ってくるので、止めてもらったこともある。
- ・行政の支援は、年会費を負担しているほか、新規設置時に、木製ラックと看板と幟代を負担している。その後の経費は、各自で費用負担をしてもらう。
- ・看板が古くなって見えなくなったり、駅長が交代して駅長会議への参加がなくなったり、課題はたくさんある。

事例報告③ まちの駅ネットワーク焼津

- ・焼津市は水産業が基幹産業で、3 つの港を持っており、

年間水揚げ量は 3 位、年間水揚げ金額は全国 1 位を誇っている。2019 年 4 月から 6 月に DC（デスティネーションキャンペーン）を予定している。

- ・焼津のまちの駅は、平成 18 年 1 月に 35 駅で始まった。その年、学び合い支え合い地域活性化事業で「おつかいにチャレンジ」を行ったが、600 人もの応募があった。まちの駅以外の力を借りて実施し、1 年後には 51 駅になった。その後減ってしまい、今は 31 駅で運営している。
- ・まちの駅になっている「ディスカバリーパーク」は「天文科学館」であるが、焼津市出身の法月惣次郎氏は世界的な天体望遠鏡の製作者である。
- ・まちの駅である「歴史民俗資料館」と共同で『偉人を偲んでまちの駅』という冊子を作った。原点に帰って「まちの駅」巡りをしていきたい。焼津の水産王など 10 人以上の偉人を紹介し、焼津の魅力向上に取り組みたい。

事例報告④ 高鍋まちの駅連絡協議会

- ・高鍋町は人口 2 万人の県内で一番面積が小さな町。平成 20 年 4 月 1 日にまちの駅研修会を行い、38 駅でスタートした。上野氏や河井氏を講師に、まちの駅の視察やセミナーを開催し、第 3 回 M9 九州会議を高鍋で開催した。現在の駅数は 42 駅。今年は「つなげるまちの駅」をメインテーマに活動している。
- ・運営体制は、会長の他、副会長 3 名、理事 10 名、監事 2 名、顧問 2 名で、高鍋町長が顧問に、産業振興課職員が理事になっている。
- ・メイン活動は 2 つあり、ひとつは「花コンテスト」。12 月初旬に高鍋農業高校園芸科の生徒らが審査委員としてまちの駅を回ってプランターの花を採点している。また、食べられる無農薬カーネーションの共同開発と商品化。母の日の限定販売だったが、500 個を完売した。
- ・もう一つは「高鍋まちのゼミ」を開催。まちの駅メンバーが本業を生かして講師になり、少人数の体験指導を行っている。子供の夏休みの宿題を兼ねて、親子で参加する「まちのゼミ」もある。まちの駅は特効薬ではないので、日々の活動が重要ではないかと感じている。

総括コメント 久住時男会長

- ・国でも官民連携、公民連携の重要性が認識されてきた。社会課題について行政だけでは限界であり、住民・民間の力に頼る必要があるが、民間と行政の距離感が難しい。
- ・いろいろなやり方があるだろうが、まちの駅は民間が主体となった官民連携の最大のネットワーク組織であり、全国のモデルになるものと思っている。



進行役：河井達志

事例報告① 鹿児島まちの駅連絡協議会 始良霧島ブロック

- ・今年、西郷隆盛が西南の役で亡くなって140年、来年は明治維新150年、NHK大河ドラマも「西郷(せご)どん」に決定した。西郷さんでつながる活動を紹介したい。
- ・29年前、霧島空港そばの公園に西郷どんの銅像を建立した。資金ゼロからのスタートで、高岡市の鑄造会社に相談し、1年2カ月で資金を集めて完成させた。その中心人物が、鹿児島弁で言う「ぼっけもん」の大坪徹さん。残念ながら昨年亡くなられたが、古民家を改造したお茶屋をまちの駅にした方だ。なお、高岡の鑄造会社「榊竹中銅器」も、「高岡銅器の駅」というまちの駅である。
- ・9月24日が西郷どんの命日。そこで、まちの駅が中心になり2日間のイベントを開催している。主婦の方に手芸品や雑貨を出店してもらったり、示現流という薩摩武士の演武と体験教室が好評を得ている。10年続けることで、ようやく認知してもらえるようになった。
- ・始良霧島ブロックは、坂本龍馬の新婚旅行など、他にもテーマ性をたくさん持っている。

事例報告② 宮若市まちの駅連絡協議会

- ・宮若市は、福岡市と北九州市の中間に位置し、両都市から車で40分。若宮町と宮田市の合併で宮若市になった。まちの駅は旧若宮町時代に9駅でスタートし、合併後19駅に。トヨタ自動車九州もまちの駅になっている。
- ・第4回まちの駅九州会議を宮若市で開催した。ネットワーク活動は「スタンプラリー」「瓦版の発行」「毎月の駅長会議」「勉強会の開催」「行政との連携事業」等。
- ・スタンプラリーは、まちの駅からの提供品を景品にし、看板の裏の隠し文字をみつけてもらう、ビンゴ形式で景品を当てるというやり方で行っている。
- ・瓦版は隔月発行で、市内の観光スポット、イベント、裏情報、季節に合わせた情報提供をしている。
- ・駅長会議は毎月第3水曜日の午後6時30分から開催、イベント打合せ、情報交換、おもてなしの心を学ぶ勉強会も併せて開催して、スキルアップを図っている。宮若市の担当係長にも参加してもらっている。
- ・5月には総会を開き、市長や議員、協力者等も招いて親睦と意見交換の場を設けている。

事例報告③ かすやまちの駅ネットワーク

- ・福岡県粕屋町は、神功皇后が戻られて応神天皇を出産した海宮のある歴史のまち。近隣の志免町や篠栗町にも関係する神社が多い。応神天皇は全国の八幡様のおおもと。
- ・駕与丁公園は4kmのウォーキングコース、700本の桜、バラ園など、地域の憩いの場であるが売店がない。そこで、年に数回実験的に出店をして、通い餅などを販売。

- ・JRの駅が6つあり、長者原駅など、JR駅もまちの駅メンバーである。現在は30駅で構成されているが、志免町や篠栗町、久山町など広域に広がりつつある。
- ・地元の高校がまちの駅のメンバーに入っている。文化祭で模擬出店し、まちの駅から仕入れて販売している。
- ・粕屋町は児童増、高齢者増の人口増加のまち。地域の小学校の駆け込み訓練や子供の大声出し訓練を警察と連携して実施している。今年は「一駅一美」をテーマに、セーフティステーション活動を計画している。

事例報告④ まちの駅ネットワーク本庄

- ・埼玉県本庄市は、東京から80km、歩いて群馬に行ける場所にあり、かなりの田舎まち。平成18年に31駅でスタートし、市町村合併で増やして、現在は63駅である。内訳は、小売業14駅、飲食10駅、不動産・建設業6駅、病院1駅、寺院1駅、サービス業21駅、専門学校・塾2駅、運送業1駅、その他7駅。
- ・全員が集まるのは大変なので、月1回17名によるスタッフ会議を開催し、そのスタッフが2~5駅をカバーして伝達している。駅長会議についても伝達している。
- ・それとは別に委員会を設けている。以前は4委員会だったが、今年は広報編集委員会と総務交流委員会の2つにした。委員会の中で勉強会をしたり、参加意欲を高める活動をしている。
- ・勝手に本庄のまちコンシェルジュは、市内在住で何かに精通している方を講師に招いて、地域を知る講習会を開催している。年間12~14回の講習会で、本庄のまちを案内するコンシェルジュを認定している。

Q:まちの駅と商工会との関係はどうなっているのか？

A:粕屋の場合は、商工会が中心になって事務局を務めている。鹿児島は県連だが、商工会も役所もまちの駅の一つとして参加している。本庄市の場合も、商工会議所が一駅員として参加している。宮若市には商工会と商工会議所があるが、それぞれ駅員の一つとして参加している。広島廿日市は、合併して4つの商工会・商工会議所があるが、大野町商工会からまちの駅を始めており、これから他の商工会・会議所に呼び掛けていく予定である。

提案：女子会を推進しよう

- ・本庄では女子会を開いているが、女性パワーが全体を引っ張っている。もっと女子会を利用していけないのか。まちの駅の会員は男性が多いので、奥さんに参加してもらって、内助の功を発揮してもらうといい。女子会の推進を提案したい。



進行役：上野春樹

基調報告「インバウンドと観光連携」

後藤玄利氏（一般社団法人タグフィット代表理事）

- ・インバウンドは、これから大きな柱となる産業である。訪日観光客数は、昨年 2400 万人と初めて 2000 万人を突破した。2003 年から増加傾向にあったが、リーマンショックや東日本大震災もあり、500～800 万人程度であった。それが、2013 年に 1000 万人を超え、その後はどんどん増えている。2020 年には 4000 万人になることが、ほぼ 100% 確実視されている。
- ・理由は、政府が入国ビザを緩和していることが大きい。ビザの緩和次第では、その後に 6000 万人から 8000 万人にすることも可能である。数少ない日本経済の成長領域であると考えている。
- ・すでに、ホテルを予約することが難しくなっている。東京や大阪では稼働率が 70～80% になっている。都市部は限界に近付きつつあり、今後は周辺にも訪日観光客が流れていくのではないかと考えられる。訪日外国人にお金を使ってもらえるチャンスがたくさん出てくる。
- ・訪日外国人が困っていることは、①施設のスタッフとのコミュニケーション、②公衆の無線 LAN、③多言語表示の分かりにくさ、④公共交通の利用、⑤クレジットカードの利用となっている。1 位と 3 位が言葉の壁。我々以上に、外国人の方が困っている状況が伺える。
- ・言葉の壁を崩すことにより、外国人の旅先での不便や不安を取り除き、日本の良さを満喫してもらえる。事業者はより高度な“もてなし”を実現でき、地域経済の活性化にもつながる。カフェでくつろぐ外国人も増えているが、食事メニューが日本語だけだと頼めるものが少なく、コーヒーだけで済ませてしまう。地方の商店街等では、海外の方が来ると面倒なのでシャッターを閉めてしまうという話も聞かれるが、実にもったいない。
- ・外国人に人気が高い大分の由布院では中国語や韓国語の看板表示を始めている。ただし、多言語看板が増え過ぎると、景観として日本らしさを損なうことが懸念される。そこで、スマホを使った「多言語翻訳サービス」の活用を進めている。『タグフィット』は QR コードを利用して、外国語を翻訳するサービスを無料で提供している。
- ・インターネットでの情報収集は、各国の WEB や SNS で情報を収集している。そこにどうつなげるか。飲食店でも、Wi-Fi の整備に行政が補助を出している例もある。

パネルディスカッション「まちの駅のインバウンド戦略」

帆足千恵氏（インアウト株式会社取締役副社長）

- ・日本の津々浦々に魅力があるのに、伝えられていない。まちの駅として、面でのインバウンド戦略が重要であるが、知ってもらわないと来てもらえない。外国人対応の音声

サービスをすることで、理解を深めてもらえる。日本の素晴らしさに感動して、SNS で情報発信してもらえると、リピートにつながる。

- ・外国人旅行者が来ていない地域では、近隣の外国人が来ている場所から、次に来てもらえるように誘導する。
- ・それぞれの地域の魅力や強みは何かを知ることが重要。気に入れば、ファンになって何回もリピートしてくれる。例えば新潟県村上市では、サケと酒の組み合わせ。飛騨市古川では、欧米向けに自転車で農村サイクリング。民泊であれば、一緒に釣りに行ったり、畑仕事をしたり、料理体験などが喜ばれている。

江口和義氏（武雄市観光協会おもてなし隊長）

- ・武雄市は佐賀市と佐世保市の間にあり、人口 5 万人弱。全国的に注目を集めたカフェ付き図書館は年間 100 万人近い利用があり、外国人も立ち寄っている。
- ・韓国発祥のトレッキング「オルレ」の 14.7km コースを設定したが、韓国人の参加者が増え、宿泊客数が 9 倍になった。トイレのルールが違い、韓国は使用した紙を流さないの、日本のルールを案内している。途中でお茶や休憩など様々なもてなしを地域で行っている。
- ・武雄市では「タグフィット」を 67 施設で導入しているが、ラーメン屋では追加の注文が増えているという。
- ・佐賀の観光コールセンターは、急病などにも対応できるように 24 時間対応している。英語、韓国語、中国語、タイ語の 4 か国語でスタートしたが、14 か国語に広がっている。外国人にやさしいまちづくりを進めている。

上野春樹（甘木朝倉まちの駅）

- ・甘木朝倉まちの駅のマップには 4 か国語の日常会話が掲載されている。訪日観光客が増えたが、「外国人はお金が落としていかない」という不満の声も多い。しっかりとインバウンド対応をしていないからではないか。
- ・お風呂の入り方でもトラブルが起きているが、ルールをきちんと伝えたり、準備・対応が図られていない。外国人のせいにするのではなく、考え方を改めるべきである。

提案：東京オリパラをまちの駅で勝手に応援しよう

- ・2020 年の東京オリパラがインバウンドのピークになる。そこで全国のまちの駅で PR 合戦をしてはどうか。サッカーのワールドカップ時のように、各地のまちの駅がどこかの国を勝手に応援することで、オリパラの機運を高めるとともに、外国とのつながりを作ることを提案する。



甘木朝倉コース「九州北部豪雨被災地とまちの駅めぐり」（企画者：上野春樹）

九州北部豪雨で甚大な被害を受けた「三連水車」の視察とネットワーク型まちの駅の発生の地「甘木・朝倉まちの駅」を探訪。蜂蜜の駅（藤井養蜂）、おやつの駅（ハトマメ屋）、魚の駅（なかにし）、ビールの駅（麒麟ビール）を訪問した。



朝倉三連水車



水害の被害状況の説明



魚の駅で昼食



ビールの駅

鹿児島コース「南薩&桜島&霧島満喫ツアー」（企画者：河井達志）

124駅がネットワークする「鹿児島まちの駅連絡協議会」の事務局（まちの駅宇宿）を訪問。その後、南薩地区の指宿の砂むし温泉を体験し、その後は鹿児島市内巡り。翌日は桜島と霧島のまちの駅を見学して、鹿児島空港で解散した。



まちの駅宇宿



錦江湾を望む



天然砂むし温泉



桜島まると案内の駅

北薩コース「出水まると発見ツアー」（企画者：堂脇忠男）

第7回地域再生大賞優秀賞を受賞した「着物で武家屋敷を歩こう会」の説明、フィールドである出水麓の武家屋敷群を散策し、出水市ツル博物館、出水市戦争遺跡等を見学した。宿泊者は、秘湯「湯河内温泉」も堪能した。



武家屋敷群の散策



西郷どんのシラス像(砂像)



着物・金・買い取りの駅(むらさき堂)



ツル博物館・クレインパークいずみ

沖縄コース「沖縄日本復帰45周年記念 交流と連携フォーラム2017」（企画者：赤崎隆三郎）

沖縄の日本復帰45周年にあたり、「沖縄旅の駅（沖縄県青年会館）」で、記念フォーラム&交流会を開催した。テーマは、「翼を広げ、空から開こう！地域の未来」。LCCを活用した広域連携の提案と共に、交流会で顔の見える関係を構築。



沖縄旅の駅



エイサーで歓迎



交流と連携フォーラム



参加メンバーの紹介



後藤玄利氏

編集後記

誌面の都合で省略したが、記念講演の質疑の際に、石原氏より「東北インアウトバウンド連合」の紹介があった。東北6県がプロによるブランディングを推進している。例えば、リンゴ農家では、収穫時以外の枝切り等の作業、雪の中での花見などを企画したり、日本一短命県の青森では塩辛い食事や朝からの飲酒体験など、その場所「**ならでは**」の体験をブランド化しているという。思えば「**ならでは情報**」は、まちの駅の当初から情報のテーマの一つであった。次回はいいよ丸20周年。初心に立ち返って臨みたい。訪日外国人旅行者が2020年には4000万人になるという。驚異的だが、数字に踊らされると勝ち組と負け組を作ってしまう。異国からの客人をいつも笑顔で迎えよう。GDPから笑顔を増やすGDS(Gross Domestic Smile)へ。地域間「競争」ではなく「競爽」を促したい。